水道軒稿

特別
14
1919
190

176467

和意和歌

○ 和歌所の俤を著せしに隨ひて和歌を
り取り和歌と和歌と命じたるを編み
の雅俗を兼ねたるものなり

◎ 商品陪列伝の部 早稲田の学生も商科
のなれと高尚を著集せしを会の
為に高等商業部の商品陪列伝を作り
◎ 之を任者の為に内に一品列品を見れば五六
七あり列品ならざる俗と二三の古の迴覧

早稲田大学図書館

38- 8989

早稲田大学図書館

ひき行ぶ行んとのうてまるる義よりたい方を紹介する
十数件を挙げた家目を挙げたらう中で聊か説明
を留まつたことのうるさいと
主任者の話をやめさせた大坂場合
今の場合別に如何や問題を感じ岩崎
さうも問題の赤も論ずつて別れけるこ
とを忘れたことなく、経費を安年から
一番三円一回こと二番四〜五と定まりたる
つたのくの地の年数ときに四千円とふの新る
減ぜられ或を命脈うを危うい位ひとニボ三

早稲田大学図書館

て左の如く、七月以到前を私立学校の寄附して
貰う諸々の由の如きを民友に伝ふ、主任者のこと
うを実を高銘うを不用物ひあるけんとの友
物を八ケましいこの、まだ私立の学校をもく
地つた例をまい、各方面の工業学校や設列
銘をもを貸附をを体会を指を見をを方物
廠を建ることをうをとこのをたる、

早稲田大学図書館

○灰糸　を柞蚕から取つた糸のことである、色は淡いろ[illegible]すぐれたものを絹糸と[illegible]いう[illegible]場合もある、灰糸と云ふのは[illegible]而して灰色[illegible]なるものであるが、西洋では此の糸を○糸絹と[illegible]ある[illegible]でも[illegible]色が[illegible]、保しを[illegible]新[illegible]紀の方法を改良したものとの[illegible]の用途は[illegible]ある[illegible]の上を少くうすく容

早稲田大學圖書館

げんてんとして、優[illegible]なる点も
一 桑表能多くして優格佳産なる
一 充実なる点を耐久性あるも
此の二点は林業能率上直来需用を絶したる原因ひあらう 惜し欠点なるものなるべし
一 充実あるも糸條の面一枝なるものが多く
充実の反射一枝なるもの
一 粗糙堅硬なれど稍や毛羽立ちあること
一 繊維紀法深長なる稍や交ること
一 混氣を思ひ洗濯なる収縮

すること多く収縮の方法考究すべき
未だ定まらざるもの
此の養蚕上の用途は 禮生 天蚕 柳蚕 但
屑の多きもの 高くし即ち其の性質の粗
糙堅硬なる 利用し得らるべしと
○ 経木サナダ 経々の木材を薄くカンナ
ひすけた其の屑を [illegible] 柳サナダ
とした所のえとなる此えを用ひ、唯此木
経ういろ〳〵ひとつに別名ういろのひ
あらう、えを婦人の帽子手提の類の

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

との装飾用する仕方、其の用途等麦麩ナガダと同様なるが、体裁を麦麩の較べたる程度にて且つ高価で為る、うまく必ずしも装飾を施くこと、まだ絹のごとくなる、北の原料を於て巻紙は廣幅にして多く出ること、一般に麦麩ナガダ大部輸出さんとする由印度産と酒米ナガダ其の販路を奪ひんとする勢いとなりたる

○天鵝絨　也た山あるの描えん天鵝絨

う京都にて出る、京都にあるもこれ出る、浜田にてあるものを見て、山あの画にて○そうく多く出来たる、弱き落花の二合うち最もよい、いろ巧妙出来たるも越後しとか、あと豊後を通じて多くえんさく出来る元ひあるとゝふ皮張の深さにして根本四寸其方法を異にして天、友禅にて伊勢七伊勢型紙をつゝいて糊をつけ、えんこう染めるのひあるが天鵝絨の毛抜をつけるのを、なく

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

西二、うの国産や紙ちゃ
思ひ有合せを揮ふ
跡を深料を地へ
を以て跡つり
浴衣ひドンナ立派
ど、ぬりて
○花莖の輸出年々
ますを岡出ある
と云ふ此頃

出する、こんを表裏
る板を作らん事
ます代價を
ます代價を
○木刻の牛　奇
学校ひ彫刻した
したある、こんを
ん牝牡ご
骨格と云ひ
ますと日本の

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

とゝふことをまなびて自覺せしめる、日本人の眼つゞに牛を見ても大抵を牝牡のなんだうとうらん校をのうがゝいひたきやうい、

○外國陶器　外國出來の陶器も深く出てゝ味好き者人の珍味と扱ちんと合だれ高う高出てゝたゞが、其の高田直其の儒方のの好きのうまを高ゝ出てゝを拵て三味まるのおもをい、

○陶器七寶　外國出來びいろ〳〵の七寶が出て

早稲田大學圖書館

そつゝの我う清川勘助の作を優るのを見文けるい但し外國人をいまだ清川流のを作七寶を賞玩するのテーストを表せさるものゝこゝ、和尾を優るを作七寶の細工を輸出するもしとなゝたゝ考うし外國でも特巧なる七寶細工を決して兼ねるものゝ、陶器の中も佛國のデスマーを作の日比茶碗茶碗不どの表面七寶が出てゝるの其價を二千立る法でもこんとゝ作をい、本物

早稲田大學圖書館

ひ長、先ず金線ひ花紙や丈低の拵紙と巻紙
の編むひ丈のウロの中く毒さまく〻の色の
硝子を用ひとうて、つぎ乙もびある、隨分
面倒な細工ひあるぶ、併し細工賃の千円か
いるとゞ〻ドウシテも思ひきい、そこひその不
豪の値を安くと云ふ、とゝろに硝子を
線の中くウキ乙もまきを倫ゝの網細工を
拵め鎖う硝子を受ける方ととるるものゝ
ゝゝとゝゝゝゝゝ、面ゝゝゝゝ地の方ととるるものゝ
「プラチナム」ひろけんば、中も鎖に硝子を通ゝ

依えゝい乙、こんゝうのめまゝ的の入費うも面
るゝゝゝ比、我国ゝゝ名ゝ名の考ゝゝのゝゝこん
を模し比のうあゝ、細工ゝ安ゝ安も賛ゝと
ゝゝあゝ、ゝゝゝゝゝゝ出来ゝゝ、こんを原
作ゝ比ゝゝ原値ゝを分ひあゝと云ふ、ッ下り
「プラチナ」の代ゝゝ別ゝ金属を代用し
比時半ひあゝゝ、何んゝゝ北の拵の七寶
小溝川のゝ線ゝ寶ゝ比ゝ原値ゝ陸ゝ
ッ附ゝ如ゝゝ流味のゝひある

○薄荷　我国ゝ輸出ゝ薄荷ゝ

早稲田大學圖書館

く影しいうかあるが
新うるかぎ十年間
ものと上るとこのことに

○工場用医療器械　長サ二尺四寸幅二尺五寸

の華一匣の中ニ
備前の小野まで八人に筒使ヲ「施行業局」
とでもこの命きこのが出てそのうちに
外国の工業人に
ある為工風しにこのたとえ工風の新家
とこのものいが我国の工場でも此の位ヲ改
設備を新しいこのとこの武器いう、こんを

早稲田大学図書館

ものを立てる
響の耳を
器械や、慶喜
口を塞ぐ器械や
服装の
何も職工用
ものをこの
らしく我邦
拵すべきこと
[illegible]

○教
作らんとある京よ
[illegible]
思ハんと、紡績工場
[illegible]

早稲田大学図書館

この著後意斟酌を
を除外するものは無べきひなる

○鹿皮　鹿皮のいろ〳〵の板板を染めこれを
輸出する事の盛んに強える板に、模様板も板々
あるこの多く用ゐられ小紋を染め
たのや　絞つたのの板ひあるも、一枚十一二四の値
ひあること、また倫敦巴里なども(あり)ない、
また紳士用の椅子の張る用ある
ものも(ひ)ある

○更紗　ジャワの更紗の板板や染もが

何をうつる味をもつみの面もうく思はれ、板
板を書く原具は考へるのみなる出てそう
ひが、金属ひ以つたひ柄物　形のもの板
ふこのひう、其の染料を溶める方うう前
へ噴のこときこのう実出してる、えんを
また骨ふ尖つた金属ひ、染料の柄物
のやうこの尖つたえく傳うて出るのを
ペンひ板を書く板をしと絵を書かく
のひある、また骨ふ模のえを骨ふ
を見て板板の雅版の由来するうと

早稲田大學圖書館

かつて

○伊勢屋　を桐箱に入れるなどして用へんとすることあるべし油の這入つたのを紙箱に入れそのまゝ流りする多うていが、紙箱は油を吸ひ込みやすく減ずるなつて伊勢屋の雪印用も内心びを流りて外面に輸出する油を拭いて外面に輸出する本の表紙をもいくらか用えるらしいが、上等の表紙を出すべきものとなり

○敷瓦　白耳義製の敷瓦を以て

早稲田大學圖書館

ゴムびきのゴムを以て敷瓦を作りも出ぬを得ざるべし其の製造方のキレヤひ手軽なる点の模様の高雅なるを見しく必ずべきである

○雑貨　外国人が日本製雑貨の内重なる改良かゝるべきものとして、毋論のあるゴム光の金一や絵のある扇ひ作つたナツキンや小光の玩具や便所用品の彩色、陳列的もれを七四八十銭並べてあつたら、何も値うゝものを二束三文のようであつても、一つとして

早稲田大學圖書館

毎日のものを売り、[illegible]こんを[illegible]
雑貨、日用品等をも[illegible]うんうんの商しが[illegible]
ゐる間を縫ひ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]と云ふ[illegible]
中めに、[illegible]
猫と鼠のカルポン（ポーンを真[illegible]
具を作る漆[illegible]
前掛きの[illegible]
作り物と言ふ[illegible]
を縫さ[illegible]

[illegible]ふ[illegible]
[illegible]スト」の本[illegible]
の[illegible]推し測[illegible]
[illegible]
推量さんの[illegible]
◎四つ[illegible]の話[illegible]
[illegible]試みが[illegible]
[illegible]
う出[illegible]
ガラ[illegible]

早稲田大學圖書館

所謂肺病藥「田うこぎ」に就て

（不養成說）

醫學士　竹中　成憲

近來「田うこぎ」なるもの世に肺病の藥なりとて賞用せらる其初めて俗話に上るや素より醫師側に於ては一顧の價値なきものと冷視したるに相違なきも萬犬虛を傳ふとは此事を云ふならむ圖らず有力なる印刷物の之が提灯を持つものあるに至れり故に已を得ず一夕の閑をぬすみて一言する事とせり

「田うこぎ」は學名「ビーデンス」Bidens tripartita L. にして本草綱目の「狼把草」たるは準實なり之に類するもの左の如し

一ヤナギタウコギ　Bidens v. radiata
一ホソバノセンダングサ　Bidens parviflora
一センダングサ又キッチバリ（鬼鍼草）　Bidens pilosa
一シロバノセンダングサ　Bidens Wallichii v. albiflora

右の內「ヤナギ、タウコギ」は實に藥用に供するものにして生藥を Herba Bidentis aquaticae と云ふ（ビーデンスとは羅典語にして「二齒」といふ事）獨逸俗稱 Zweizahn kraut（二齒草と云ふ意）菊科に屬し歐洲にも產し結石病に用ゆ其成分は單寧、エーテル油及び植物粘液なりとす

以上成分の中、醫の採て以て効用を期するものは植物枯液の吾人の粘膜に多少緩和的作用ありとするも主なるものは單寧及びエーテル油なり

單寧の醫治効用は頗る廣く今肺結核に關係するものを案ずるに左の如し

第一　健胃劑となる事
第二　盜汗を止むる爲めに古來用ひたる事
第三　出血を止むる爲めに古來之を水用するは勿論內服し喀血にも之を用ひたる事
第四　下痢を止むる爲めには今日の醫學に於ても欠くべからざる藥品たる事
第五　糖尿病の藥品たる事

以上は古來不變の定則にして健胃劑の肺結核に必要なる止汗、止血、止下、皆共に同病の對症療法として應用すべきも又糖尿病の末期が多く肺結核に終るを思へば第五の理由を以て單寧を肺結核の豫備藥と爲し差支なきなり

宜べなるかな單寧は最も古き肺病藥なりコルチット氏結核論五三三頁化學的藥劑の第一席に氏之を記述す予昨年「應用肺結核療法」を公にするに當り之を左の如く譯出せり

本品は結核の最古き藥劑の一にして千七百年代には盛に用ゐられたり近代之を賞用せるはウオアリエ氏にして千八百六十三年（文久三年）なりレーモン、アルトー兩氏は動物試驗の結果之を人類に應用し結核進行中止及び輕快を報告せり其他デ、シエーガー、ウイチデマルコの諸氏同一コルチット氏は動物試驗に因り効果を認めず（處方二例附記）

上記の論文は佛、英、獨語にて現はれ居れり（書名今略之）

然らば「單寧」が古き肺病藥であり「田うこぎ」が「單寧」を含む以上は敢て不思議の事にあらず

尙ほ上記成分の一なるエーテル油は總て呼吸器病就中「痰」を以て來るもの〻萬病藥たる以上は益〻本品の本病に賞用されて差支なきに似たり然れども肺病藥は予の集めたるもの〻みすら殆ど三百種あり而して肺結核の療法は隔離、營養を主とし藥品を第二位に置く事若し藥品を用ゆるならばクレオソートが一番宜しからむと迄煎じ詰め來りたる此二十世紀にあつて古の昔の「單寧」に逆戻りするとは洵に沒理的の骨頂なりとす

本品使用の由來が明白にして山師的にあらずと爲す所以のものは只此草が松平子爵の所有地に生じ居たると其近傍の冤元大審院判事が共に培養に勉めたるとの二事あるのみ或日來りたる一人の年寄が之を所望したるに始まるにあらずや此年寄が洋の東西大家が數百年間に數百種の藥を求めたる以上のものを知れりとすれば學者の顏色土の如しと謂ふべし

早稻田大學圖書館

○吉田家が美濃家の第一の傑作となされた
江戸生駒氣樣御作
〃幸市郎の筆も亦美濃の中に入れ
ある、吉田家も此の作を乾も左のごとくこれを
る
此作を三馬の二十三部の内を淺んだ
名作なること京傳の我が中美と雖ども
此駒次郎の低い鼻を世の中の流行
とする後に京傳鼻といひしも即ち駒次
郎を畫しものなる又二ヤケ此男

を駒次郎といひしも是うめなること定める
なる二代目駒次郎を出す
地紙屋を国十郎門之助などを勧めしること
其名世に高し
世中の追副の故向を捨る曲亭馬琴
が新編金瓶梅を敬なること
以て此の作の高明行ハれることを知るべし二十三
部ものとあるを式亭三馬の名作二十三部を
選び出る内の淺んだるを云ふなるべ、左る二三部
をおもへんか

艶容は女郎買をしてゆつくりやきもちをやく者
ゝをけんぶ一向ゝ強合をしどうかやきもちさくや
けば答紙をあとはきいからとの浪又びこるゐ
出して妻を抱くゆく物ゝばこつき回さんる
を此上もなき楽しみとそそるける
へはつかしい事ゝぶ出さんをかゝかゝやかゝを
ゝくさがどうもいくゝ心ばゝ行くもちつとや
いを美ゝくゝめくぶ行ゝつゝ八丈と結綿綿
を買てやらう
へホレニ男といふものゝ事ゝ義理いゝ

ゝ行く女郎も女郎ゝ人の大ゝの男をとめて豆
くさらゝて又おまくさんゝ日おきくさんゝ此あと
は八丈と結ちりが出来ゝかゝの事ゝさ
或時芸者をゝて宅角男といふ者を折柳かん
ゝをゝを思ひ出ゝゝぶんとくゝゝ地回りの雷
を一人前三両つゝて四五人新ゝ仲の所ゝ
多いぶんゝつもゝ美人ゝ美の二階ゝを寝兵
衛を雇ひ豆をめりやすを唄ゝ乱れ髪を深
井ゝ振ゝ積ゝて見代へは書生を楽
揚屋所の紙出して水髪ゝ結び結ぶを

早稲田大学図書館

つかもとまるバうしと解るやうにして擲のはる
がハイ擲子がころ〳〵片息に笑つて抵抗どこ
ろではなく氣は早く針よと跪きてやうしくに
氣がなけり

・・・・・・・・・・・・・・

艶治しき安心の噂を聞て金満家と結婚の望を
するを聞き君の金満が婦となり何事も勤労を
更にいと面白く思ひけれども一人息子の事なれば決
して笑ひぬと云ひける角紙漉と此記の元来
は七十五日が御の勤労と極まる日限つ切ると

早稲田大学図書館

早くぬ、引え事にて流しけり
艶治しき嫁入の勤労を受けれども母の方らしと
金は入用なる事を何とか送りけるを何とか注
氣を商売として見やうと種に乞く此の色男の
する商売を地方の貴人ならうと思ふが直に来ぬに
地紙売と出かけ一日出て行て足に肉刺を出かし
是をしやしこりしける
へ紙をあつくと目をやけるのびあやまるやー
又惚れきうで色男もうるさいぞ
へテヤ色男待のやうな顔の人が通ると出来

早稲田大学図書館

夫ゝ又いろ〳〵深氣に乗が来て後ろ立とすうろ
ゝ七十吉のゆゑがせん有家ゝは勤番を許さ
人と為の使徒ゝ未だ深氣を為さり故八
家族中の取扱ゝ廿日間の迄を延ひやうや
うゝ閉塞けんはゝ四ツト堅ゝ作孔を
一書舎を指る氣ゝ方の深ゝ有ゝ
故深孔の持ゝを先く表と思廣
をやつて至ゝ深孔佛といふを本国ゝ
紹さゝる法ゝ先深ゝを千ゝ有ゝ

早稲田大學圖書館

をし孔の高ゝを買集る（下巻）
深孔寄軸の自ら風刺の意を富ゝ流布
八の本ト也

◎黄表紙「大悲千観来」ゝを金交の代
二十三部の一ゝ加えゝ名作ひ書ゝ
二十三印中の他一と賞ゝ
の記ゝ本を掲げん

比本ゝ一冊物（海文）（紙出板）代ゝ出
ゝゝゝ名心二十三部の内ゝ第一等の
出来ゝ大ゝ板の潰ゝ

早稲田大學圖書館

世の中あるうちのうち嘉永年中関西の商人が一部秘蔵せられし京西屋の主人（高山の義也）が大きな眼鏡と譯う言はれしそれ四方を高人某氏と共に不世出の奇物なりと強雄しといふ其故は文化文政間世人の結び付きし珊瑚樹を元出しと称して偽造の寄贈を再販しとうしと少しかく称するあるも此再販のうちでも此作を絶つ迄数物なんと夫々手の巧ひ

をるけ首尾をくし結く行届いとうのうう
ハ〻方を一二節を物ちんぶ
冒頭の四〻
千三千紀言も云へべき佛も不思議を来てをショコト
のういうをアラいたはしや日千本の御手を赤
く投料も貸出さんとの御振を少くとも
大寺代地の方信を面の皮厚千兵衛といふ
山師（平東）紀言さきまる御手く出抜ちのく
……
いよく千千の御手を面の皮厚い投料貸を

早稲田大學圖書館
早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

ちと学ちと先達の寺忠度と先陣とを
茨木童子人形芝居の捕手てんぽう三宗手の
ちい世帝りを者を名三味線のひきちゝひ
手の入田のあを者を貴様上下おしるくて
ゆ傳りさるこをちかける

手のちい世帝を手手の御手を借ひかとといふふ
は客をあやちを事をはひ者を成たが見てい
事を投掛傳の手をちを掛をちをつりの
客の藪を見ても元やちを眠さちを顔をして

早稲田大學圖書館

来が来て
「おいちん手を取ちきいしとよ
と客の前も探かちをの新を行くのひもし客が左
つゝけをちをを三ちをかんだんの手をもちる
事が出来ず元の通りを雨もちをちい世帝
第七仕番ふを困ルと云て一月切を借ちもお
番を引てちを引合て時ひはちをしを
俗分とちをちをしてが遂を一割引のお掛ひ
一月切を傳を見苦しい年番を迄ちも
あるとさンやはから日しうざんさ様へ

高橋北海がいつも好て嘯さんとせし
を京傳の前の作なりしかいとゝ北海の方なるを
知る、蓋し京傳二作の敵んを云ふこの
あるべし、京傳を取るを云ふ時蹟
なり

◎唐来参和の「莫切自根金生木」三馬の撰ぶ
二十三部の内で幸者そでを口を拭めて涙をしてた
る、全体唐来参和を其の名を推すを支那人
の孫を知るを、高橋の味を味を面白

ちんと云ふとが、文章を後を見て高雅のあ
ることをうるを、北人を云ふ四方を作ること
めるくいきうるが、心を多い、高雅の
語法を産出に作を書れて、北の莫切自
根金生木」は碩学参和の手紙をかてこの、本書
は唐内者所の「金生木」の内を強つて
作り、高々先生を云ふ高雅あきて
ものして金を筆者を悲をそうと つとる
也、まゝ金を溜まるうて書を云をもうさ
かをと京伝が新を開板しこの作を云く

早稲田大學圖書館

さ、扨も狂言のうちにあるが其の前今を味を
ちう〳〵深く、どこやら「シレムボリズム」でもあるやうな
思ひうちと作者の投紙を見るやうな
（前略）狂言と工夫をめぐらし仕でもやたら俳諧
て世上の人々ものはをさせたるは事新しき意
くべしと俗をまを接待の方れを門口迄出て番頭
かまはず来る人毎に俳諧出しなんと煙草盆
の切炭しのめく俳人の入を良けんども事新
る分の一句ぶず
「おんぼろ〳〵びんぼううう仕やをわか

「御迷惑の為のあそびあるを所詮御俳諧とするを
出来まをぬ
「野暮〳〵ふうは御迷惑〳〵と投句人外を事の
外まをぬ
「時分まををしふうとして接待を俳人をよ
こしまをセう
是では〳〵ぬと又を工夫をめぐらしん苦をを
好の紙を沒あるうちは俳諧宴をぬおと俳を
事接待ひと心ざし外面は三流び内幕は苦
しい悪の深さうを煙草を見立初今から山吹

早稲田大學圖書館

をかくし三百二十四日間を深くその揚げ城の
落ちを楽しみけるが如くの八月から約束三百日
の末花観音の堂の鐘の音や菖蒲
ふく秋の夜長三百の月と語り明す昔でも
後世いきつきさうなと思ひの外並ては
ぜん大金をもふ石屋でも来やうかと内子から
内緒にて前数しに金をもあつめ渡せい
事ゲジくいふて踊りを舞ふて五しやると
「旦那さま嘉兵衛様のやうでも長い子
を私の子をウンとこれお渡りなさいまし

「ゆんでもかくりもしやうが金を返さうと
雑儀に
「私どもは頂戴つかを四くびゆをやすぐれも
拝るお黄ひやしやと内子でやかましう
御言ひやせす

早稲田大学図書館

志摩花波寫

あさくら

似宝知著

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

柳樽

させたる紅おまくおきて あきつ常ろよ
もたれ目をそゝくさまぬゝるをゝい
足をそゝろそろて 泥ぞろるをいひ
つめえをやめ ぐ地ゝの 地走ろう
屋の上ゝ 朝おきをまる一人ゝる
まるくらい すいき 伏なくゝ面をさ
志うとて志てさんるとゝ志づうろう
まるくゝをゝとゝ足ゝるいゝもめん
衣ゝうゝ志ゝゝこやゝとむいゝん

家ゝ 行ひゝひゝるすゝゝをぬすむやう
ゝ町のゝめさせをうでゝ ねさゝば
どうきゝゝうゝでゝゝゝぬけばゝけうゝ
ゝのやゝひどつかゝゝ出すゝきついぬ
もゝのやつゝのゝをゝゝをゝゝゝゝゝ
ふんどうやふゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ
志こうゝゝくず中ゝのゝゝゝゝゝ
屋のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
間男を志ゝのを足をゝどゝゝゝゝ
いやゝゝばいゝがゝゝゝゝゝゝゝゝ

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

よくつゞきてるさを也 大きけん

○風流源氏物語 六冊

相臺 寿春本しまの出版

出版元 洛多武田氏

武田氏の指圖にて

秋屋山房にて

此の書都て錦の地也 源氏物語を

ずゝかの書きたるものなるべし 然

史の隆達を取りたんとてあらび

宗長の紀行を源氏物語の取り自ら

歌を俳諧の様に似たる

ひまとるゝと詠しなり

也 如何歌傳を

更に別屋敷を免えんか、此書

人を政をそなへ時事を記忘さる、

全の作者もしくは忘さる

なること、文体を

此のおもむきを一班をうかゝ

早稲田大學圖書館

冒頭

それ無縁の衆生とハ人こころの天のほして浮鷗
楊のうきしづむしらへはなれあくまで
の池のしるハ八千ばの一ふしまおこり、花の葉
なる鷺、おもふみかけ鳴鹿の声あよぶ
を敬ひそれは、いきとしいけるものいろん
うつ世をおもひける、無路をひやりあ
あれ見る世も世をさのふ世、ある世俗世
なうんの世、今年ハふんだびのぬる世、ふとせ
をかけし契世、親族あひ給ふ種袖引バ

ふびんやさしの一枚あめあわれいろうをかえ
まもあるし、人こころくつちきのるもあるも、おの
けしきのかよふもあらし文夜おもふ志は
うんて、ふさうむざんまじひあるくとき、寛のい
さぬ世のそしるをつゝむ心のいとまなく
あめさきるゝ思ひぞん二世をちぎるハ
あまのなかや、一河の流るゝをむつるおあ
まで恋のかなけんぐまつるはつとめ給て恋
いうる日よはある六ののこふの情つもりて
命をまて、心中するも恋の山高きいやしき

早稲田大學圖書館
早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

原ひとそろへ、もきをろうそくまつ
やすきはかりをそなへ、みづうちいまつをと
おそるべし　てしをし

源氏誕生の條

そもそもあげうんぬ世の中のまれなるひとの
かぐやかなる玉のやうなる男子をうまれたまへる
ときこそ血ちをいとをもてなし、みそをいと
きよやかにもてなしたまふいとをきよ
殿もそこうれしう目にのあまるさは
母更衣はそのまゝ、大きゝ御殿の御

早稲田大學圖書館

面もてなしもいとゝ朕に似たてまつらハセ
のひめさんの七夜の御祝ひ、百日の御祝ひ、一つの
まうけをしたまへ、摂家方、大中納言、参
議の面々、殿上人、数しらず参り給ふ。
あるうち、二三の漢の御料理、又ぶちとも
を船の汁、事物盛の松茸、妻もて
ひる日出鯛の御鮨、二の酒の肴、
お志を鯛のとりさゝうる、花橘の
りでいかるめひとり上達白ハ赤ざい、先酒ハ正さう
紀をうんばいつんな

御免さふらへぬぞ、皮ふくろを笠屋を
出しとくとくふくろ解て屋さまくと、新の
おもしきうけ給うをひたぬるゆ言ハ
し、面くはる手ゐ帆をひけて、このうち
あの一ぬしさきのうをさの法上戸月を
ろとも集上戸、起上戸八
引うけくのもうをの、ひくめんどうおやと
冠をぬぎ烏帽子ゐをかしん大ろく、筍
をたくいておもハずも上ると浪花相まる
小哥、おのくお料の桃もをつくし、まず

早稲田大學圖書館

そうまをの酒とよ三ようゐ、ろをを
桃の酒くめば、そのようひをひやめの
酒、あをすぐし花洛の池清水江川
のあハもものんび、儀酒ゐをは伊丹とあ
う酒、素酒くろを洛酒ひの
きく酒、そのまくもゐ酒、さめを
かゐの白酒、人のひき濁り酒、うの白樂
天ゐ世界をひくうん酒をうををうをを
ふくくゐん酒、あれ木のそのさうつき
ゐ、ひをもひをもおしろくて、天宮くひる

早稲田大學圖書館

新風杉の井の三ツ巴内定ふ高ちけん
ども紫雲殿のうち房庭ハ多屋見世
出す公家もあるも、すひる御祝儀
まる、という人の諸名を芝源氏とれん
けのひ父みうとうとうとも七枝の御様ある
てうふやへうすくの
をくるもあるうち

帚木の骨董ハ四く
かまみうう木のめもまの的ぶれや、芝源氏と
ハもやナ二才まうう絵ハ高ひつる骨董の
まんかくみ、あるまるのみまうをうもも、人目の

関路志のぶ山、おもひのうもさハうもある、戸の
なるうんめ正ゑを懐抱と名のうつを、きの
どくなんと母をもいうし、上面うえをうう
う、下ハ染出す色ハ袖、南ゑをゆる吉岡ハ大
紋ハ浅黄うう、俗ハのハ二重帯、
髪ハとろりとをけもる、こはきもとゆひの
茶釜髪、赤ゆをを赤うう花目もうう、こ
赤の衣服をもぎうもし迷金の姫ハ桜
をめう、裏ひやふうとも弱ハ和めうう
上廊も地ハを出会えを涎をうさうも

早稲田大学図書館

絵ゑんと、うさぶ花の女さろし、いろ〳〵
の色自慢かさう〳〵が始とて、北ろさおも
ふまゝとぜんつけるもおぞつうろ〳〵、ひふ
ゝの上のぞうさ、めしまんきのさしいで、
右ぶよえそうぎろ〳〵ゆくて、こだんんのう
たうびもけさことりうときこへけて、されば
源氏のせんつきぬもの方まおいて、うちつ
けて屋つくりと向方〳〵仕うけの表風
の、糸ろと〳〵る書物のうひきやうきは
きらいて、たゞろ〳〵ざうや、北

手をくびき紙をつく〳〵し、りを結ぶ物ぶる
ことをよろこびぬふ清くせろう云
回夜国の名物 村井の煎餅 此屋うち長崎
長崎よりと云ふ国国より大和 朝の極
ろとろふ名をつけることに、こんをし
すもろ〳〵ちろ〳〵の美味のたゝんろの
歌を国もびこのびゆる
いくら名名物のことき法螺でも国名の
方の事をろうとき むう大番数日を早べるすの
ハ表、男換とこのことを云ろ口〳〵ぬろを

早稲田大学図書館

之に陪き初めは これを反し 村井のオールドは輸
入（零売）ひあるところ恰も天のことく懸るを要めし
其ハ続ゐ新聞紙の大看板を出したる
村井の看板ひこのごろ誰れやらの読み浅草公
園に出したる新聞紙の看板を高さ十間
幅五間ほどの費用を六百円、これの市内第
一の大看板なりといふ
道路市内に出してある本村の高さ六尺幅三
尺乃至十五尺を通じ其数が七千一個の費
用ハ百七十銭

村井商会の看板の総算ハ一年二万円略する
ハ一万弟径銭をまることもある、而しオールド
の最も多く売れたときを一日七万円と達し
たさうだ 看板の数純も六万余あるだ
此の看板を一手に引受けたる本田四郎次東京
園中に出した廿万円の仮広告を乍えてれより
確ふすは日本第一の画工よりも千倍もエライと云
ふべきひあるが看板を満州 栄前の看板屋
共栄社主大吉英松ひある
◎みかう うつて大阪の花柳界子 つりもない

早稲田大學圖書館
早稲田大學圖書館

づきとて あきさうなれきんるうつきの紅のうるを
ぬるを、男女格子を隔てゝ互ひにしやつり人えい
えんを以のて結を固し 不可の義厳めとな
すよりなほ可ゝ嫌しきうしてうきを
を、また同じ浪を乗うて日々の動
作を女郎ゝ結八ゝ おくる情あるし
ことをもこゝを、ゝゝ東和もむうしみ
うゝを結八ゝ米のうゝを髪うゝは
飾るゝ八ゝことあゝをもんゝを京屋の仇
傾冥四十八日の中ゝ京屋の仇
ゝくゝ

いろ糸とゝ女郎の風来や時雨をを
教ゝゝこゝゝ 点ゝをおもゝいろ白うゝ
いもゝゝ ひつはのゝゝ りゝ白うゝ
北繁 昼ゝゝ北の家のみび髪をゆの
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
習慣一般ゝ行んゝゝゝゝゝゝ
回陶器の隙人 このどろ小ゆゝをんゝんゝゝゝ
の逸話を一寸取ゝて見ゝゝゝゝゝゝゝ
別ゝ注目を惹ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

早稲田大學圖書館

趣味を乱したのみか、織巻の作風にも武斧を振
もあるやうに陶巻の作風の陶冶したあつた
ことがある、一つは直径二寸三分一つは三寸
程もある陶器と云ふ小品が京にて出来
らい用ひやすかりき、佐賀藩にて人を傷けるに於
ても乱れて国元に於て傷しいひあくる、さして
候が兼ひあくうるゝよ経済的にもなる所である
ととのへ掲むんをいつては何の国の何の役にも
勘定にかゝるものゝ作家の癖に用へた
らしいと息の路を存したは改作の附した

早稲田大学図書館

あつたが、この改作がまた豪商に趣味を添
へたる、たとへば佐賀のかたれたる陶
器の名声は伊万里があり、佐賀の豪傑
連が殊を語るに於ても其の土地の物産の
和用に思ひ付けたる自然の勢であるか
らだ、且つ又重ね不足のあたりに改良を試み
に戦争にかけてと云ふのがたる總てに於し
丸を製する様なことが出て来ても、甚だ続きうる
うにも苦しまぎれにコンナ工風を考えたのであ
らうが、其の事の由緒を推測してみると

早稲田大学図書館

早稲田大學圖書館

そうして西瓜の如く戦ぜしめたいという、定見一致の、字義を意味する[illegible]の項目を[illegible]代表する[illegible]、因て記す所の弾の外面にあるものの香の施しあると云しく定説あるも、色もまた白くしてまた南国の[illegible]アバタのごときの凹凸を見るに認む、手を取って按じ得てりしも中を[illegible]ソリヅトと云ふ命の音を聞く

◎凍酒　日出戦ぜて物を凍る法酒八一ヶ月三千石を上つて三千石を[illegible]多い故だ之を二十箱人の出価を割引を見る一人一日僅に五勺[illegible]の酒を飲むと云ふ困難を[illegible]大機の事じゃない、そこで吟醸酒を凍らしたもの量を作る物を[illegible]の方を有うんとする工風を加へて[illegible]、此法を[illegible]の大発明[illegible]磯を減ずる方法[illegible]西技師[illegible]氏[illegible]つて業[illegible]を用ひて酒を凍らしたる結果は好結[illegible]をなしたるで凍つた所が飲用な

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

佛事ことごとくこれに、その
を拾えばけだし大いに談めしてみるべきを
ひとすべてこれ大義者にこの清酒
まさに酒の清率を意味すると又
出仏者のみなる妙義の寛大の徹絶論を
強しいてこれあるとそうふ、誰人にこの説を
北西の仏教の事一に酒の三分の二絶滅つて仕
あるのみにもこれ強の三分の一を残存
しにもの其の強の酒がどうこの作用をなす
ものの、一般の味を生じて凍くるの前ともも

大なるこうまくまつたくこれ強の
るが化学的目ひ清酒が出来ても酒味
を減しまい上大いに出来たればひとも
戦的の使命をあるもの
回霊魂不滅　とこれ京僧の二大しに
善悪王のことをきつつ一比ものへる
の乳仏伝を離れて元物しまうと矢鱈
の仏の体を乗り移る様に考へる説
あることを一定の附
説い者！　終る霊魂不滅
天堂の方便仏とも

早稲田大學圖書館

昭和図書館

八、霊の学術界でもいまだ位を得るに
至らぬが、近頃霊界の研究者の間に解説う
るものあり、近頃欧羅巴の学術上から
此の説を是認せんとする学者ボツボツ出て
来た様だ、なれども某氏の霊の解剖
学上より此の説を是認しかつ之を説明する
ものと其のいつわりまことを調べる
意味からのみ、思うに此説サイヤンスの上う
らづけ一概に否定すべきあらず

現在人類の生活心理をよく研究
しようと霊魂学が各種の仮説を
霊魂界の一端ずつ論証しようとした
ものいう、但し霊魂かわ滅まず流
のようなこと一般同様定説の一回説にて霊
魂の存在を認めるものと思うが此の同
様定説の一回説が人体を説明出来ぬと思ふ
霊魂が人体を組織する他の原動力と同じく
其の霊魂なる動力を為すの業
を行うものと解釈せざるを得ぬ即ち

早稲田大学図書館

四 奉行動する脱党の心霊を因ともあんとて
いまだ知らず印稿をもって実心と霊四の心俗と云
し雖さるべき事なるべし 御所もてなる四迎んひ其の霊
魂も心為なるを以て利益霊魂
不滅と為んは 又原子と性を宇宙万
生々変化を推論せるを得四 霊魂
心霊魂の滅の後サイヤンスも発生
する事能はざるこそ出来る、原子の活
動を不思議とし霊魂の存在を霊魂の存
生をの不思議とも及ぶべきあるまじ

早稲田大学図書館

単に原子の活動現象を外なりさんば也
回 その敵なるも一遍の二遍を紀念節使
切手を貼りしも、よっぽど、意味の孤順の
隔意も、あるかあるべし浜
ともいうべきあるべう、えを単に人の奴
隷を湯を七しもちろん人のいたい、西
方の奴隷なるべうとい、旅順
隔意紀念の為ひ作ひ、満塩を流れ
し生天を流れも紀念が新しい、勿論其
郵便物の切手を印刷すべき同例

早稲田大学図書館

早稲田大學圖書館

うち七日ばかりは、日ごとに某々の使者を加制し、
紀氏を以て文書を加制し、
外国人をして文書を受けしめ、
六現今郵便局及び軍事郵便を設置し、
手紙を送ることを得ること、
さきつころ紀氏の方
を書し出紀氏人を
して送ればよいとあること
ず外人を殺害し婦女を
辱めたる六又は人物
の義務の日本の義務の

外国を投資をもって永く
名を[illegible]国を傳いることを
◎閔氏の朝鮮を使して美術品を収集
し紀氏を[illegible]大体その朝鮮を遺物を
い[illegible]流の美術品を[illegible]
じ[illegible]とそ[illegible]
し紀の[illegible]遺物を[illegible]
どこでも美術的遺物のあるを首尾[illegible]
歴朝の首都の古蹟を[illegible]
[illegible]の都を美術、任那を[illegible]

早稲田大學圖書館

八扶餘、高句麗の八王統を命じて國を高麗
（即ち高句麗）を高 新羅 任那を表義しう
今から一千二百餘年前迄の新羅を一統さん、
其後三百年ばかりして新羅も亦衰へ、
此、北方龍を一面城とする五百年も永流したう
今の朝鮮迄の代を及び京城を五百餘年
来の都を定めたのである
朝鮮に於ても新羅朝以前、即ち三韓時代を
全く遺物のみ、（因みに三韓時代を我
我崇神天皇以前のことで神功の朝を改の三國

時代である）それから新羅朝も紀元を紀
元とする仏教を信ずる新羅朝も今
まもたの三時代を大別す
新羅時代より凡二千年前から
高麗時代より凡千年前から五百年前迄
朝鮮時代より凡五百年前から今日
我國を高麗を「コマ」と訓むの、実は高句麗
を前記の高麗と混ぜ朝鮮
新羅時代の三時代を細分さ
ん

○漢化時代 即ち漢朝の影響を受けし時代にして彼朝滅亡の後来る

○南北朝化時代 凡千五百年前頃より始まり、即ち支那南北朝代に其文化の影響を未だ之を推古時代とす

○唐化時代 千二百五十年前頃より唐朝との交通を保ちて朝鮮を経て文化の影響を受けし時代

昭和女子大学図書館

而して三時代以前の民族を傳存せる点、三時代中の一番二を遺物のみ、唐化時代なる事、三期にして、唐化時代の遺物の傳存あり、また二期のみの遺物の傳存なし、我が隆寺なる一時代にして、我が隆寺は何もなく、朝鮮と我推古朝の関係遺物上の点を徒に浮雑い

(二) 新羅時代 飛鳥中唐化時代の遺物のみ一つ二つ遺けん 唐化時代の遺物を最も佛四寺に多い、此寺に新羅の影響なる事明なる事あり、其四

早稲田大学図書館

早稲田大學圖書館

里程を表示する標識、石造りの宝塔の壮大なる石階段のアーチを組み
彫る為なり しかるに我が国の石造物
の之れを比すべきものなく、此の石塔二基あり
一を石塔一を多宝塔と云ふ 共に花崗石
なりと雖も前者は四十尺にして最
も奇巧を極めた構造である 其下部は四角に
なりその上部は八角にして之の角柱を囲し
蓮瓣の彫刻あるも好る石工なりしなん
も石塔としては高尚なる比類なきなり

此の高石塔の二基あるは奈良時代の
しるしなる花崗石なりこれ其下部を
方形とし柱を丸彫にして仏像や人物を
図彫としたる、柱の上下にある蓮瓣は東大寺
三月堂のものに酷似し天平の作なる
うたがしくこれを当時の産出なる花崗
べきなり、高さは約壱丈廣八尺 仏二躯あ
るも其形化を除くのほか、保存良好なる
奈良朝の高尚なる作にして
唐風を模倣したる 同塔の立ひる

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

あるべき事なり、其間多しと雖も其間多しと雖も
あるべき事なり、其間多しと雖も
代々あるべきなり、其間満優多の西方
を具せざるべからざるなり、
を示せざるべからざるなり、
行すべきなり、
又芝増寺も南方二千町余にして芝増寺と東寺
とあり、鎌倉時代の創立にして北条氏の
帰依あるも、尚ほ豊太閤の侵略を強し其後
ばかりなれば、其後寺院之を復興せ

早稲田大學圖書館

ざるを得ざる事なれば三尊を
祭りたるも、外観八幡風なれども一種異
様なるの石山岩を以て築造したるものなり、今
殿後に立てたるものなり、
堂の四隅に石物あるも、堂の八角にして仁王像を
安置せり、風雨
大和尚の千體祈願の祖牧上郡
仁王堂と云い、一体地蔵寺を鎌倉時代に
谷寺を天武天皇時代に其お能く備え
四五十年の歴史とどこ

東京帝国大学図書館

う伝へるものあるも信ぜられざるべし　　二地寺の附

近の瞻星台とうあり、花崗石圓柱の上に築き

即ち天文を観るべし、これも我邦の天文学の

ものなるべし、高麗の天文学の発達せし

故なるべし推測すべし

北京城又月城あり城郭を土築し高さ七八尺

径七尺八寸ばかりなり二千年前の新羅の遺物

なるべし、もうしろ城中に寺院立ち

しなんうなる路方もなく唯北門を出

陵数もなく一見あるべし高麗初代の墓を

信ぜしもとより北の古墳なる極出なる土器

我古墳時代の土器なる新式なり好く似たる

なり

芸州の南つの例の鐘閣あり径七尺八寸周囲

二十四尺　我紀貫院なるものしかさい高とを

徳寺なるあるしと京　新羅の宮殿即ち

我移殖之日なる時代なる事なるべし　朝鮮の

鐘中に文大文字のなるべし地鐘の高さ八

寸邦なるも比類なし之来なる朝と同時代

のものなるべし新式教味せる天寸風なると云

東京帝国大学図書館

又支那にて西方の大宗武烈王の陵墓を我齊明
時天皇八年の築造なる北太宗の朝鮮攻撃
の前後の大英傑なり唐と連合して百濟を
亡ぼし高句麗を滅ぼし三國統一の基を開いた
人なり太宗の墓を経る人許の土陵なる
さんぬ其前面七十米ありて石碑あり亡龜背の
上に高さ十一尺一個の花崗石にて造る千
二百五十年前の作なるも亦のこと
驚く外なし海を渡り首の周囲
や甲縁共に寶相花及雲紋あり其風を

早稲田大學圖書館

たゝふる朝の若とおもふ石碑の輪廓は六角五
層中金を以て寶珠を抱ぐるが如き雄麗
なる其の前記の鐘を出る北の石室の
技術も亦大進歩を示し石室の高さも
高所の我を抜き朝鮮術を進めて八さる
事疑なし石碑風を立てる風とは
風を立てけれ所なる間接に似したる点
多い弥生式土器上の点を知るべき
ものなるべい亦し寶四年北太の墓碑の存在

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

彼我の比較研究をなす洵なるかな
惜しむらくは清盛の伊勢
の氏弱き現代の朝鮮朝は内自ら排仏主義
を作きなる上外は外寇ひ来さんとし中国も亡び物
地方を豊太閤の六度蹂躙さん、蒙古の一度来
鎌倉時代の中頃に元国を滅ぼし
して大陸の遺物を掠奪する思ひ、梵鐘の
ことき日本の工芸品を尚ほ存するのうらの
くの高麗ひあるべし、新羅時代の遺物の如し
いのも是れもまた次第ひあり

(二)高麗時代　北宋時代は開城を都とし宋元の風
を受けたるの中頃前四百年宋風後百年は
元風を強く強く元朝の影響をうけ
北宋時代の遺物をもって開城を満月台とし是れ
即ち王宮の跡ひ石垣や石階や瓦
其他の強固なるもの
あると高麗時代の末頃
作りしものにて彫刻の如き
の大綱と比すべきもの外は北宋の美術的遺物
二あると一は京城にある元大因寺の大理石塔

早稲田大學圖書館

ありて續き開城より四里許なる豊徳の元敬天寺の
大理石塔なり此寺塔の精巧なることは國中に比なく
其の時代の作者は元の順宗の時丞相脱々二人を
遣はし來りて建造せしめ而も個をもちてあつらへしものと
云ふ其の高さ四丈十八尺許りに三重壇上に立てる十
層塔なり其四方には多く佛像や草花や人物などの
彫刻の甚巧なり京城のよなるを甚白なるもの
豊徳の方は灰色にて其細工は纖巧なり殆んど
るものも風雨に曝されたるも鮮明にて殊に
豊徳なるは少しも損滅することなく生々と流気を

早稲田大学圖書館

存して雄渾である其全形も三流である其の彫刻は細
部分までも極めて秀麗精細で日本の寺院物にも其
比類なし朝鮮にあるものにも高も巧妙なるもの
である。京城の方は其上部なる三層丈は下に卸し
ありしを德正が招きて送らんとして卸でし給ひ置てそ
ぞの人四人をもちて盗み取りたる豊徳の塔に至りて
深山中の寺にありて殆んど知るものも無かりしも余が
探究中の事を見しこの頃
此の寺は江に沿ひたる恩津と云ふ所に彌勒の石佛
あり高さ八十餘尺人工夫千人を役して三年を費しし

早稲田大学圖書館

東京帝國大學圖書館

等のことは史上大いに考へらるべき大佛も三金を加へくる
紀元
(三) 朝鮮時代　八幡神の景福宮昌德宮昌慶宮
おもはせる大紀模りて大祖の時創めたる樓
へし太閤征韓の役に焼かれ韓人自ら編纂せし
獨り昌慶宮を其一部を除き殆ども四百年
前の建築も三四棟の殿のみ宮殿を今日即位の
際に使用し再び人民の骨髓を搾み膏
血を塗つて作りし文武二流に北京の紫禁城
に倣ひて造る狀飾紀模りて後に考へて造る

東京帝國大學圖書館

文廟閔廟の拜殿は聖像つかうまつりて
りかしこ高麗の石碑の大同觀音寺の碑
まるもの三十年前のもの太宗武烈王の碑
の次きも反駁なり又京城の鐘路なる大鐘
八徑七尺四寸周圍二十四尺なりと其の大鐘
と共に朝鮮第一と称せらる
要するに以前の新羅なるも高麗時代に及びて佛
教の美術なりしが今の朝鮮時代となりてよ
りは排佛廢寺累遂俗の風行となり聽うべんば
歳例を受けること佛教の衰退と共に佛教の美

早稲田大學圖書館

術も亦足利氏佛教の代に起りて朱子
流の儒教なり、儒し儒教的美術と現ぜ
ざるを得ざるべし

明治三十七年六
月十九日起筆
孝俊少人